マックス・E・アマンの

世界馬術界展望

Max E. Ammann's Vista of World Equestrian Sports vol.04

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、
障害飛越のワールドカップを創始しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。
そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

欧米のインドアのホースショーに歴史あり

多くの馬術ファンはインドアのホースショーは馬術用の競技場で行われていると思っているのではないだろうか。事実は奇なり。というのも、西欧のワールドカップはその半分がスポーツアリーナで行われ、残りの半分は展示会場やフェアホールで開催されているのだ。ワールドカップでさえ馬術用の競技場で行われているものはひとつもない。

初期のインドアのホースショーとして19世紀のパリ、ニューヨーク、ブリュッセルで開催されたことが記録に残っている。インドアの歴史は1866年のパリにさかのぼる。このとき今は無き産業宮で開催された。次いで1901年の開催時の会場は今も残るグラン・パレだった。50年代までパリのホースショーは社交界における1年のハイライトと考えられていたのだ。一方、ニューヨークにおける最初のホースショー、「ナショナル」は1883年に23番街のマディソンスクエアにあった駅の跡地で行われた。その場所に残されたビルの壁が崩れた折、ヴァンダービルツ家の支援によって豊かな財政を誇るニューヨークの馬術界はその瓦礫を取り除き、同じ場所に真の馬の殿堂である二番目のマディソン・スクエア・ガーデンを建設した。1926年には3番目のマディソン・スクエア・ガーデンが48番街に作られた。ここは主に当時非常にポピュラーだったボクシングの会場として使われたが、ナショナル・ホースショーもそれ以前と変わらずこの会場で開催され、ニューヨーク社交界の花形イベントとして残った。1968年に現在のマディソン・スクエア・ガーデンが32番街にオープンした。この4番目のガーデンは多目的アリーナであり、オペラや政治集会なども開かれるが、ここで1995年までナショナル・ホースショーが開かれた。その後会場はニュージャージのメドウランドに移り、現在はケンタッキーで行われている。そして、19世紀における3番目のパイオニアであるブリュッセルのインドア・ホースショーは1835年に始まったが、現在この地では開催されていない。

20世紀前半に入ると、ベルリン、ロンドン、ジュネーブ、トロントでインドアのホースショーが始まった。しかし、1940年までは現在のような人気の高い障害飛越の競技会ではなく、古典的なショーの場であった。1930年に始まったベルリンも1908年からのロンドンも、1925年からのトロントも障害飛越はプログラムの一部でしかなく、ジャンプ競技と同じように重要だったのが乗馬術の披露であり、たとえば隊列の妙、馬のマナーや美しさを競い合うことだった。また、歩様の美しさを競い合うホックニー競技、ハンター競技やいくつかの馬車競技も行われた。

ホースショーの会場として理想的なジュネーブのパレクスポ展示会場。©Jacques Toffi

インドアでの障害飛越の始まり

インドア・ホースショーで障害飛越が本格的に始まったのは1940年代のことだ。1947年、パリの屋内競輪場、ヴェロドローム・ディヴェールで始まり、ついでロンドンのハリンゲイホールのホース・オブ・イヤー・ショーでも行われるようになる。この欧州の2つの首都で行われた障害飛越競技会の成功がインドアに対する意識を根本から覆してしまった。ベルリンとブリュッセルはその成功に準じ障害飛越を取り入れるが、唯一ニューヨークの社交界だけはそれまでと同様にジャンプありハンターあり馬車競技や馬の品評や歩様など昔ながらのプログラムを続けた。

西欧において現在に続く本格的な障害飛越競技が始まったのは1954年のドルトムントだった。4年後にはアムステルダムとウィーンで行われる。それに次ぐ20年間で新たに障害飛越競技が各地に広がっていく。開催地はスヘルトーヘンボス、ボルドー、ヨーテボリ、ヘルシンキ、チューリッヒ、シュトゥットガルト、オスロ、メッヘレンと枚挙に暇がない。米国ではハリスバーグとワシントンで現在、この新たなインドアでの障害飛越のイベントが行われている。

1978年に障害飛越のワールドカップが創設された時、西欧ではすべてのワールドカップをインドアで行うこととした。それには2つの理由がある。夏のCSIO大会、いわゆるネーションズカップへの関心がワールドカップに移行し薄まることがないようにという配慮がひとつ。そしてインドアのCSI大会は夏のCSIO大会より国際的に注目を集める選手が参加しているにも関わらず、内外のメディアの関心が高まらないためインドアを盛り上げたいというのがもうひとつの理由だ。予想通りこのワールドカップは大いに注目を集め、今では屋外の競技会よりインドアの方にメディアの関心が高くなっている。しかしアーヘンは屋外の大会でも別格だ。この大会は年に1度の大イベントとして多くの国際ジャーナリストが注

text: Max E. Ammann design: Dynamite Brothers Syndicate

チューリッヒではスポーツアリーナを活用している。
©Katja Stuppia/Mercedes-CSI

目しているのだから。

インドア会場の変遷

前述したようにインドアのイベントの半数がスポーツアリーナで、残りの半数が展示会場で行われているわけだが、スポーツアリーナで行われている都市はヨーテボリ、ヘルシンキ、オスロ、チューリッヒ、シュトゥットガルトなどで、展示会場を使っているのはジュネーブ、スヘルトーヘンボス、ライプツッヒ、メッヘレン、ボルドーなどだ。ロンドンのオリンピアは展示会場を使用しているのだが、その会場の中に簡素ながら常設のアリーナが設けられているため、いわば折衷型だ。

スポーツアリーナは観客にとって必要な施設が整えられているが、馬のための施設は一切無い。アリーナの会場内に厩舎やウォームアップアリーナを設けることができるスペースはまずない。となると、会場の外にその施設を作ることになるわけだが、それも作れるだけの敷地がある場合に限られる。たとえばシュトゥットガルトでは会場の外の施設を会場から離れた場所に作らざるを得ない。そのため馬は交通の激しい道路を横切らなくては会場に辿りつけないのだ。ヘルシンキのハートウォールアリーナは山の途中の急坂に沿って作られている。そのため平らなウォームアップアリーナを作るため大量の砂を運んで来なくてはならないのだ。

展示会場にはスタンディングのスナックコーナーやトイレ以外の施設ははじめから設けられていない。そのため資金をかけて競技用馬場を作らなければならない。このように展示会場での開催では主催者が施設や組織の問題を解決しなければならないとしても、スポーツアリーナよりは使い勝手がいい。なぜならスポーツアリーナの多くは特定のスポーツを想定して作られているからだ。たとえばヘルシンキはアイスホッケーのため、ボローニャはバスケットボール用のアリーナなのだ。

ジュネーブの空港の向かいにある巨大なパレクスポ展示会場はホースショーの場所として最適だ。ときに屋根のあるアーヘンと言われるほどに。ライプツッヒの市外にある贅沢な新しいフェアホールはインドアのホースショーに必要な施設がすべて調達できる場所だ。メッヘレンとスヘルトーヘンボスは小さいホールながら観客の熱意に支えられている。ベルギー人とオランダ人はともに社交的でホースショーに行くことは競技を見ることだけを意味するのではなく、その付近のパブやレストランに行くことも大きな目的なのだ。スヘルトーヘンボスではホースショーが農民の祭りと呼ばれるカーニバルの時期に行われ、メッヘンではクリスマスから新年のホリデーシーズンに行われる。

いくつかのメジャーなインドア・ホース・ショーはその会場が過去に何度か移されている。たとえばヘルシンキは広大な規模のフィンランドのフェアからハートウォールホッケーアリーナに移された。ジュネーブではかつて古くて狭い、今は無き展示宮からレヴエルネ・アイスホッケー・アリーナに移り、10年ほどのち、現在の巨大なパレクスポに収まった。ボルドーでは4回移っている。1976年に1キロにおよぶフェアビルで開催された。これは毎年行われる25の産業展が一度に会するこのフェアの客寄せとしてホースショーを行ったのだ。このときはこのフェアの主催側がショーを組織した。ボルドーでは、その血気盛んな市長、ジャック・チャバン＝デルマス氏が明確な理由もなく競輪場を建設した。しかし、自転車競技では人が集まらなかった。そこで、この会場にはまったく適さないホースショーを無理矢理持ってきた。開催にこぎつけたのはフェア主催者の尽力があってのことだ。とはいうもの、あまりに不向きなその会場での実施は目も当てらない失敗を数年続け、その後会場を新たなフェアビルに移され、以降この場所ですでに35年続いている。

マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられる。そのかたわら、馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟(IAEJ)の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざま大会でディレクターを務めるなど、多大な貢献をしてきた。